

第196回 日文研フォーラム



お札ふだが語る
日本人の神仏信仰

The Japanese Pantheon
Represented on Paper Charms



ヨセフ・キブルツ
Josef A. KYBURZ

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 片倉もとこ

● テーマ ●

ふだ

お札が語る 日本人の神仏信仰

The Japanese Pantheon
Represented on Paper Charms

● 発表者 ●

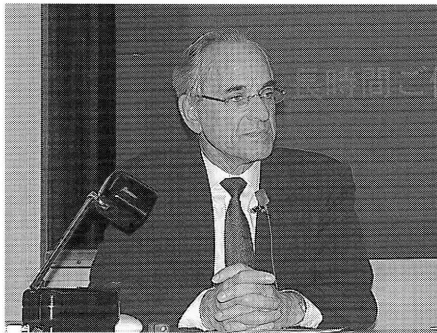
ヨセフ・キブルツ
Josef A. KYBURZ

フランス国立科学研究センター 教授

Professor, Centre National de la Recherche Scientifique, France

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies



2006年11月14日 (火)

発表者紹介

ヨセフ・キブルツ

Josef KYBURZ

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略 歴

- 1983年 3月 Ph.D. (パリ第7大学)
1983年 4月 フランス国立科学研究センター助教授
1988年 4月 フランス国立科学研究センター教授

著書・論文等

Cultes et croyances du Japon - Kaida, une commune dans les montagnes du Japon central. Paris: Maisonneuve & Larose, 1987, xxvi + 293 p., 20 ill., 48 pl., 1 carte. ("Cults and Beliefs in Japan - Kaida, A Village Community in the Mountains of Central Japan")

"Value Changes in Japanese Society - Meeting with Fukami Ai," in Klein A. et al. eds, *Modernization in Progress-Demographic Development and Value Change in Contemporary Europe and East Asia.* Bonn: Bier'sche Verlagsanstalt, 2002. pp.359-370.
Ed. *Éloge des sources - Reflets du Japon ancien et moderne.* Arles: Picquier, 2004.

"Dans le miroir de l'histoire: les vicissitudes de Sugawara no Michizane du Moyen Âge à nos jours," in Kyburz, J., F. Macé, C. von Verschuer, resp., *Éloge des sources - Reflets du Japon ancien et moderne.* Arles: Picquier, 2004. pp. 539-595.

「ヨーロッパにきている日本のお札：その三つのコレクション」『国史学』187号、2006年、3-17頁。

"La réponse de Maruyama Ôkyo au Titien," *Cipango* No.13, 2006, pp.7-48.

他多数

お札みだが語る日本人の神仏信仰

お札はご承知のように迷信くさいものです。近代化、都市化が進むと、お札に限らず、迷信的なものはほとんど消失してしまいます。にもかかわらず迷信は、現代の日本人の日常生活の中に染み込んでいます。

読売新聞社が行った昭和五三年度の世論調査の結果を見ますと、縁起をかつぐ日本人は、全体の約七割を占めています。それは具体的に、「友引の日に葬式をださない」とか「仏滅の日には結婚式をしない」といった六曜に基づいた知識が、日常化していることにより示されています。同じ読売新聞社の世論調査で、護符（お守り、お札）をいつも身につけていると回答した人は、全体の約六割を占めていました。

護符は昔から、日本人にとって社寺へお参りにいくときに、必ずといってよいほど手に入れて帰る、あるいは、もつと昔には、陰陽師らによって配布される、もつともなじみ深い宗教的呪物でした。

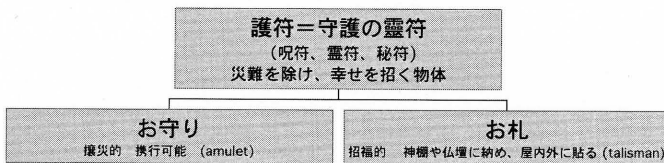


図 1

ですから、お札を通して、日本人の信仰の歴史を深いところで捉え直すことも不可能ではないでしょう。

まず、護符の概説的なお話をいたしましょう。^(図1)護符は呪符とか霊符とか、たまには秘符とも言い、災難を除け、幸せを招く、と信じられている物体を指します。宗教学では英語で、除災的なものを 'amulet'、招福的なものを 'talisman' として区別していますが、両者の区別は明確ではなく、両方の性格を併せものも少なくありません。その信仰は呪物崇拜 (fetichism) に基づくものと考えられています。護符は古今東西の民族に広くみられますが、その用法も多様です。

日本の護符は極めて多様ですが、代表的なものとしては、お札やお守りがあげられます。^(図2)お札やお守りにもさまざまなものがありますが、ごく大雑把にいうならば、お札は神棚や仏壇に納めたり、屋内外に貼られたりします。お守りは携行可能なもの、身に付ける小型のものと言えます。いずれも印刷されたり、書きこまれたり、あるいは描いたりしたものが多く、神仏の名、仏の種子(梵字)、呪文、

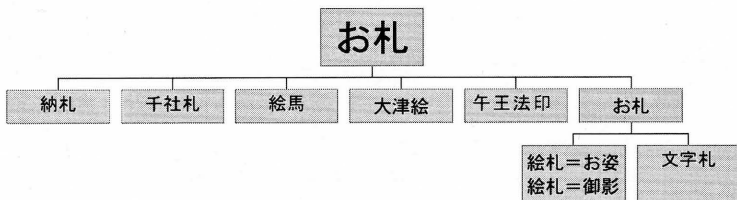


図 2

特殊な記号、神仏の眷属図などが記されています。日本のお札やお守りには、陰陽道、道教、仏教の信仰に基づくものが多いのですが、おおよそ仏教系（真言宗系、天台宗系、臨済宗系、日蓮宗系など）、神道系、修験道系（天台、真言、神道などが混漚）、そして民間信仰系にわけられます。しかし、その思想の起源は、外来の信仰が入る以前からあったと言えます。

皆さんはお札よりもお守りの方をお持ちでしょうが、今日はお守りには触れず、お札に絞ってお話させて頂きます。

お札の目的は人間の願望を叶えるためですが、それ故にお札の種類は願いの数だけ、つまり俗に「願いの数だけ神は居る」と言われるように、無数にあるのです。例えば、開運、学業成就、良縁祈願、家内安全、交通安全、子授け祈願、災厄消除、社運隆盛、商売繁盛、病氣平癒などです。皆さんがお持ちになったり、お家で貼るお札は、たいがい印刷されたものでしょう。しかし、印刷したものであっても、お寺の住職や神社の宮司がこれらのお札をまとめて、神社であればお祓いし、神前に供えて祝詞を奉じ神明の威力をお札に込めるのです。お寺でも僧侶は本堂の経机に置いて読経して威力を込めるのです。

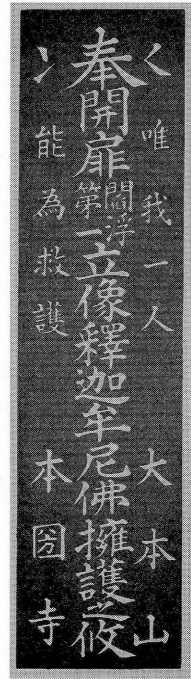


図 3

お札といえは、一般に、短冊状の紙に符文字が書かれたものを思い浮かべがちですが、画像が描かれたものや、彫刻などの立体的な造形物もあります。今日お話するお札は、短冊状の紙に符文字が書かれた、いわゆる文字札(図3)と、神仏のお姿が描かれているもの、いわゆる絵札(図4)のことです。その殆どがもちろん同じ紙面に文字と絵が併せて書いてあるものです。

お札やお守りの包みを開くと罰があたるとか、また一年が経てば神社にお返しして新しいお札を授かるとか、といった事情がありますので、お札やお守りを収集することは難しいのです。しかし、こうした小物で、しかもそれほど物的価値のないものに関心をよせて収集した人は明治時代以来何人がいました。その人達が日本人ではなく、西洋

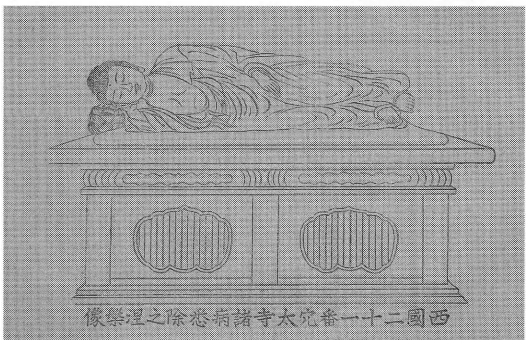


図 4

人だったということには、何の不思議もありません。現在その存在が知られている日本のお札のコレクションは三つもあつて、三つともヨーロッパにあります。いずれもお札を民俗学的資料とみなして、学問的視点から集めたコレクションです。年代順から一番古いのはB・H・チェンバレンとラフカディオ・ハーンが収集したもので、これは当初からオックスフォード大学のピット・リバース博物館に保存されています。次がアンドレ・ルロワール・グアン、最後がベルナル・フランクの収集品ですが、この二つはそれぞれ最近、ジュネーブ市の民族学博物館とコレージュ・ド・フランスの日本学高等研究所に遺贈されました。

さて、ここで紹介したいのはベルナル・フランクのコレクションです。これら三つの中で、一定の方法にしたがつて構成されたコレクションはこれだけです。フランクが収集したお札は一、〇〇〇点余りを数え、北は青森から、南は長崎・大分にまで及び、その大半は自ら現地におもむき、入手したといえます。

日本仏教、特にその画像学を専門とし、コレージュ・ド・フランスの教授、日仏会館フランス学長などを務めた故ベルナル・フランク（一九二七〜一九九六）は、一九五四年に初めて日本の地を踏んだ時以来、その研究の一環としてお札の収集に努めました。教授のお札との出会いは、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の『知られざる日本の面

影』を通してで、日本に到着した一週間後には上野不忍池弁天堂にお札を求めに出掛けたと言います。

さて、フランクと日本のお札は一体どういふつながりがあるのでしょうか？ フランクが日本の文化の中で、特に興味を引かれたのはその宗教的要素です。そして初めてお札の図版を目にしたのは、大学で日本の説話文学を研究した時によく利用した『法宝義林』という日本と中国の経典にもとづく仏教大辞典の中でした。それは一九二九年に出版された第一巻に掲載されているこの馬頭観音のお札です。^(図5) このお札は御殿場の円通寺のものですが、彼が一九八〇年代にそのお寺を訪れた時にはまだ並べられていました。このお寺は、ある武士が「鬼かげ」という馬の菩提のために建立したもので、動物の加護をします。すなわち、農家の人々が家畜の加護を祈りに参詣に来たのでした。図のよ



図5

うに馬と牛が描き添えられています。農家に家畜がいなくなった現在では、その代わりに競馬関係の人々がお参りするようになり、お寺には純血種の競走馬や騎手の写真がたくさん飾られています。馬頭観音の信仰は、こうして以前には想像もしなかったことに変容し活気をみせています。

『法宝義林』の同じ巻にもう一つ別のお札が載っています。それが不忍の弁天様です。^(図6)この弁天様は『金光明最勝王経』による古典的な八臂の姿で、その上に宇賀神信仰との習合を表現する鳥居を額に飾り、画面の下に富と利益をもたらす、脇侍の童子と道具を描き出しています。こ



図6



図7

れは室町時代から一般化された弁天の形式といえます。初めて日本に着いた一九五四年、フランクは直ちにこのお札を求めて不忍池へ出かけましたが、無駄でした。このお堂は戦災で焼けてしまい、戦後再築されたお堂では、お守りのような小さな略式のものしか出していませんでした。その代わりに、池の向い側の山の上にある上野の清水寺にお札が置いてあるのを目に留め、それを手に入れました^(四)。そのお札は、有名な坂上田村麻呂の観音信仰とエゾ征伐を結びつけたもので、中央に千手観音があり、左手に勝敵の毘沙門、右手にいわゆる勝軍地藏が配置されています。

それからしばらくして鎌倉の円応寺にもいきました。学生時代に熱心に読んだハーン『知られざる日本の面影』の中にある、ハーンがそのお寺の閻魔様のお札を手に入れた話を良く覚えていたからです。もとの閻魔像は、非常に印象的なもので、十王やその他の眷属に囲まれ、すべて十三世紀中頃のもので、ハーンが紹介しているこのお寺の言い伝えによれば、運慶が死んで大王の前に出た時、「まだお前は私の像



図 8

を彫っていないが、今私を見たのだから、これからよみがえって、私の像を作れ」といわれて生き返り、そのあと運慶は「蘇生」と名づけられたといわれています。その図が
図8このお札です。比較的に元の彫刻に忠実に描けていますが、お札には、前世の業が写るといわれる閻魔の代表的な持ち物である鏡が、丁寧に描き込まれています。もう一つ注目されるのは、台に描き込まれた波のモチーフです。これにはどういう意味があるのでしょうか？ おそらくこの円応寺が元あったという場所を表わしているのではないかと思えます。なぜなら円応寺は、現在は建長寺の傍にあります。江戸時代以前は由比が浜にあったことを、地元で調べて知ることが出来ました。ですから、海の傍の閻魔様ということではないでしょうか。

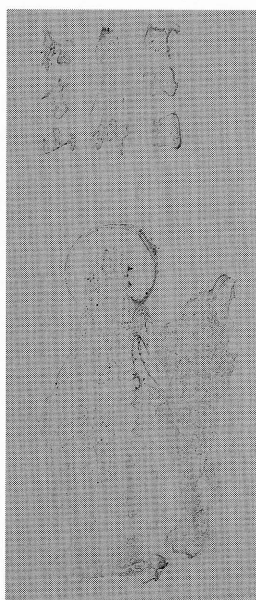


図9

このことは後でまた触れますが、お札に描かれているモチーフの解釈に関係してきます。

この円応寺のお札は線がはつきりとしていますが、ハーンの時代から五十年下った時点のもので、すから、きつと彫り直されたものでしょう。版木は時間がたつと磨り減りま

すし、火や水によって破損はそんいたします。その場合新しい版木を作りませんが、その時、全く以前と同じ型にしたり、または多少形を変えることもあります。その例をお見せしましょう。

最初にお目に掛けるのは、日本三大文殊の一つ、山形県の亀岡文殊です。(図9)この場合、古い版木と新しいものの違いは、絵の様式とテキストの書き方に限られています。フラックが一九七〇年に訪れた時は、版木がすでに相当傷んでいて、ただ一枚残っていたものを貰って来ましたが、ご覧の通り、ほとんど何も見えません。その後新しく出来たのを送って下さったのが、その左側のお札です。ご覧のように、古い方は細面で尊嚴の趣



図10

きがあるのに対し、新しい方は丸味のある親しみのある表情に代わっています。イコノグラフィそのものは変わっていません。剣と書き物を持つ文殊の姿です。テキストは少し改められています。

二番目の例は、もう少し重要な変化をみせています。¹これは江ノ島のお札です。¹⁰源頼朝の時代から明治の神仏分離に至るまで、弁才天は江ノ島で祭られて島の本尊でした。神仏分離以後は、この天女の像は別館に移され、一般の礼拝の対象になっていません。ここにお見せしますのは、明らかに分離以前のお札で、前にお見せした不忍の弁天と同じく八臂で



図11

あり、波の上の島に座っています。これは幸いにも古版画を売る店で見つけたものです。排仏の後では「江ノ島の大神」と改名されました。普通純粹な神道のお宮で出すお札は、絵姿がなく文字だけですが、神仏習合の雰囲気のまだ残っている神社では、この例のように、絵姿の伝統が続いていて、ただ少し化粧直しをするという条件を受け入れて、このようなお姿が残っているのです。

この二枚のお札^{圖11}では、女神は古風な髪形で、左手に鏡を持ち、右手に珠を持っています。この珠は、仏教の弁才天の宝珠を受けついでものです。この二枚は、二〇年間を隔てたものですが、ここでは右側が古い方、左側の新しい方は、画面をより完全にしようとしたのか、江ノ島の根本聖地の洞窟が書き込みされています。

お札によっては、同じ形を長い間伝え続けているものもあります^{圖12}。この民芸調の大黒天は、熊野の那智のものです。ちよつとモダンな感覚



圖12

のお札ですが、実はすでに十八世紀末に、同じようなものが配られていたという証拠があります。

さて、先程ちよつと円応寺の閻魔の台座の波のモチーフ（主題）で触れました問題に戻ります。モチーフの解釈、特にお札の中に表われる特徴的なモチーフの性格について考えたいと思います。私の経験によれば、これは、モチーフを取巻く様々な状況の光をあててみてはじめて解釈できるものです。同じ様なモチーフが、その状況によって、時には別の意味を持って来ます。また反対に異なったモチーフが、同じ意味を表わすこともあります。

まずある風景のモチーフが、その寺や神社の置かれている地理的条件を表現していることがあります。山のモチーフの一例として、日本三大地蔵の一つ、栃木県の岩船山の地蔵をお見せしましょう。^(図13) お寺が建っている岩船山は、文字通り岩の船の形をしていて、右手が舳になっています。さらに菩薩が、衆生を彼岸に渡す船主であるという意味も加わっていると思います。

今度は、海から出現した観

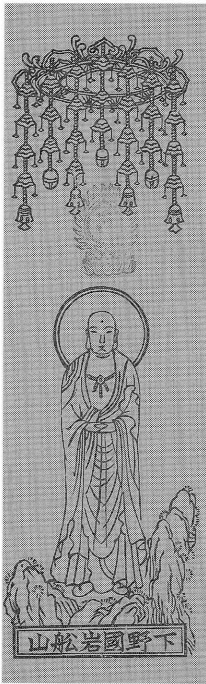


図13

音について二つの例を通してみてみましょう。この二つの例には二つの共通点があります。まず一つ、地理的条件として二つとも海辺にあり、いずれも本州の先端部です。片方は紀伊半島の先端、勝浦で、もう一つは銚子、関東の東の先端です。二つ目の共通点は、両方とも、観音の浄土である補陀洛山が海の彼方にある世界だということと、二つの観音像が両方とも奇蹟的に海から出現したということを表わしていることです。しかし、奇蹟的出現の性質は、それぞれ異なっています。勝浦の方は、

波間から出現しました。だから亀の背中に乗っています。次に銚子の方は、海の底から光を発してその存在を知らせ、魚師が網で引き上げました。だからお札では光背が輪光

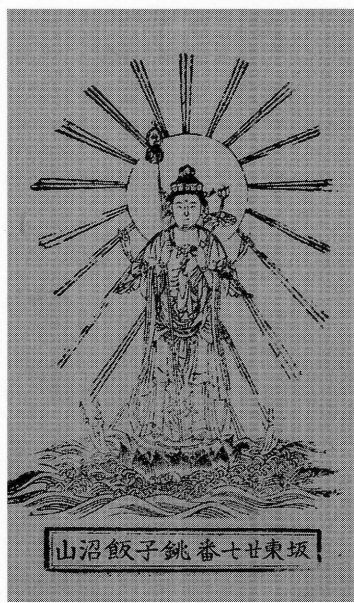


図14

の形をとり、さらに進んで、日の出のイメージと合致しました。(図14左)それは銚子の地理的條件を思えば当然なことでしょう。

これは福井県三方の「石観音」ですが、(図15)ご覧のように右手が足りません。寺伝によれば、彫刻家は弘法大師であります。ある夜、御像を彫刻中に鶏の鳴声がかえったので、右手を彫り残して下山してしまわれた。ゆえに片手観音なのだそうです。それで、このお寺は手足の不自由な人達、また手足に痛みを持つ人達が参拝するようにになりました。境内には御手足堂という建物があつて、快癒のお札に持って来た手足の木型が、絵馬堂のようにたくさん奉納されています。

さらにもう一つ、今度は伝説が生んだモチーフが尊像そのものに組み込まれている例をお見せします。(図16左)「招き猫」の起源は、井伊直孝という大老が、世田谷の豪徳寺の前を通りかかった時、門前に居た猫に誘われて寺内に入り、住職に逢つて感動したという故事から出ていますが、このお札はそれを表わしています。



図15

西落合の自性院の場合も、これに似た話で、太田道灌が江古田ヶ原の合戦の前夜、道に迷っていたのを、黒猫に導かれてこの寺に辿り着いたという話で、この猫は死後、その墓に地蔵を建てて貰ってとむらわれました（六地藏の一つは、六観音の一つと同様に畜生道を保護します）。江戸の中頃、ある商人が妻の菩提をとむらうために、ここに猫面の地藏を作って寄進しました。今も秘仏として祀られ、一年に一度だけ開帳されます。

今までお目にかけてきたものは、大体において、仏教の現世利益に関するものが多かったようですが、仏教本来の目的である「悟り」がテーマのお札もあることは言うまでもありません。その一つの例をご紹介します。

それは昔から京都東山の永観堂で配られた「見返り阿弥陀」のお札です。このお札にある、振り返って一寸驚いたように右手を上げている美しい阿弥陀の小像は誰もが知っ



図16

ている仏像であります。日本には来迎阿弥陀のある型から派生したと思われるこういう形の例が他にも存在していますが、しかし伝説では本来この像は見返つてはいず、後にこういう形になったのだと言われています。

す。すでによく知られている話ですが、平安時代のある日、永観という高僧が阿弥陀像のまわりを廻つて念仏三昧の行をしていた時、阿弥陀が壇から降りてきて、永観の前を念仏を唱えながら歩き始めました。瞬間、驚いて立ち止まった永観に、阿弥陀仏は振り返つて「永観、おそいぞ」と叱りました。その後この仏像は振り返つた頭を保つたままだと言います。この永観堂のお札には永観の信心する真心と、阿弥陀仏の優しさが深く表わされています。

日本の『仏像図鑑』等では、伝統的に尊像のカテゴリをいわゆる四種の大きな尊像別、「四種部類」にわけています。それは、(図15)

一、如来。仏陀として完璧な境地に到達したもの。

二、菩薩。未だ仏陀ではないが、やがて仏陀になることを約束されているもの。

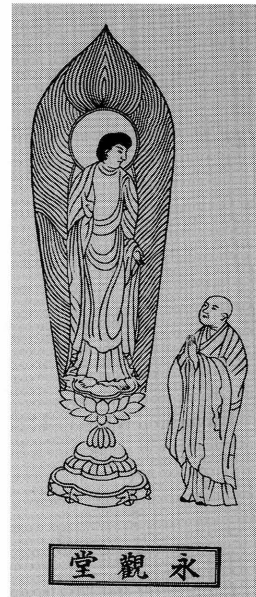


図17

三、明王。仏陀が悪の力を制圧するた
めに取っている忿怒の形相の尊像。

四、天。前身がデーヴァやデーウィー
という古代インドの神達、仏教を
守護する「神将」。

この四部に通常さらに次の二部が付け
加えられています。

- 一、権現。つまり、神仏習合の神々。
- 二、高僧祖師。様々の宗派において、
その宗派に特有の礼拝尊があつた
り、またある尊像について宗派独
自の像容を持っていることもあり
ます。

以上見てきたように、お札は十分注目
に値する表現言語を持っていることを理

四種部類 The Four Classes

1. 如来部	nyorai-bu	buddha (tathâgata)
2. 菩薩部	bosatsu-bu	bodhisattva
3. 明王部	myôô-bu	"kings of Knowledge"
4. 天部	ten-bu	deva/devi
権現部	gongen-bu	Japanese avatars
高僧祖師部	kôsô-soshi-bu	Patriarchs and Eminent Monks

解して頂けたと思います。重ねて申し上げたいのは、仏教の諸尊がどのような形で日本の土地に、その風土や習慣に、また日本人の感覚の中に根をおろしているかを、いかにお札が証明しているかということであります。

それ故に、お札に対する関心が、お札が持つ魅力に価する程にまで高まって行くことを希望しています。

註

(1) 以下、ベルナルル・フランク著『日本仏教曼荼羅』、東京、藤原書店、二〇〇二年、一四〇一
八頁参照。

発表を終えて

お札^{みだ}は日本人の日常生活の中に余りにも深く入り込んでいるから、普段話題にのぼらない。現代の京の街の中心部でも、横河か盧山寺の元三大師や醍醐寺の五大力さんという紙のお札が町家の門口に貼ってあるのが見られる。日本人はあまりそれに気付かないが、外国人の目には気になるものである。故に、そういうものを研究の対象にしようと思うのは外国人であるのも不思議ではない。

故ベルナル・フランク教授が三十年か四十年も前に集めた全国のお札の中で、その半数以上を近畿地方の古寺名刺が出したものが占める。広範囲に亘ってお札の調査を行うには、洛西の山裾に位置する日文研は、まるで蜘蛛の巣の真中に居るような理想的な場所にある。位置的な面だけではなく、そこに保管されている見事な資料のコレクション、そしてセンターで活躍している先生方のご協力も、全てがこのような研究の推進を容易にする。

豊富な資料を集められ、古今のお札に関する情報を大いに得るところがあったのは、この国際日本文化研究センターの皆様のお陰である。所長の片倉もとこ先生と指導役の小松和彦教授をはじめ、暖かく親切にお付き合い頂いた白幡、園田、猪木、早川、稲賀の諸先生方、たいへんお世話になった研究協力課、情報課、海外研究交流室、コモンルームの職員の方皆さんに、感謝の意を表してこの日文研フォーラムの報告を捧げる



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
⑩①	9.11.11 (1997)	<p>KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授)</p> <p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>カール・モスク Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>ヤン・シヨコラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授)</p> <p>キンヤ ツルタ 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」</p>
⑩②	9.12. 9	<p>ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授)</p> <p>「猿から尼まで—狂言役者の修業」</p>
103	10. 1.13 (1998)	<p>KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授)</p> <p>「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」</p>
⑩④	10. 2.10	<p>GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」</p>
105	10. 3. 3	<p>シュテファン・カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授)</p> <p>「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」</p>
106	10. 4. 7	<p>スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「幽霊と妖怪の江戸文学」</p>
107	10. 5.19	<p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」</p>
⑩⑧	10. 6. 9	<p>Hiroshi SHIMAZAKI 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「化粧の文化地理」</p>

⑩⑨	10. 7.14 (1998)	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リ ー ネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪①	10.10. 6	ア ハ マ ド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 『『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり』
⑪②	10.11.10	アリソン・ト キ タ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) 『『道行き』と日本文化—芸能を中心に』
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪④	11. 1.12 (1999)	D U Q i n 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 『『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ』
115	11. 2. 9	シーラ・ス ミ ス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪⑥	11. 3.16	エドウィン A. ク ラ ン ス ト ン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪⑦	11. 4.13	ウィリアム J. タ イ ラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑪⑧	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」

119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
120	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
121	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
123	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
124	11.12.14	X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
125	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
126	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・トレンハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
128	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

⑫⑨	12. 5. 9 (2000)	<small>KIM Jeong Kye</small> 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
⑬⑩	12. 6.13	<small>ケネス L. リチャード</small> Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	<small>リュドミラ・ホロドヴィッチ</small> Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑬⑫	12. 9.12	<small>マーク・メリ</small> Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	<small>リチャード・ルビンジャー</small> Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかつたのは誰か—明治の日本」
⑬⑭	12.11.14	<small>SHIN Yong-tae</small> 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	<small>CAI Dun da</small> 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
⑬⑮	13. 2. 6 (2001)	<small>バルト・ガーンズ</small> Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	<small>ポール・S. グローナー</small> Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
⑬⑯	13. 4.10	<small>LI Zhuo</small> 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬⑰	13. 5. 8	<small>エッケハルト・マイ</small> Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭④①	13. 6.12 (2001)	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭④②	13. 9.18	ジョナサン M. オーガステイン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサ キム ラスティーブ Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭④③	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」
⑭④④	14. 2.12	マシミアノー ト マシ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 恵卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシュュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」

⑮	14. 5.14 (2002)	LEE Kwang Joon 李 光潯 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
⑮	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
⑮	14. 9.10	YEE Milin 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュッターマン Markus RÜTTERMANN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑮	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	デビット L. ハウエル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊敵討ち一件顛末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦 曉梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オカダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉？：言語と国民国家」

①60	15. 4. 8 (2003)	ビル ス ウ エ ル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	Park JeonYull 朴 銓烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	REEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボ イ カ エリト ツ イ ゴ バ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダ ニ エ ル ス Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
①65	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
①66	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響—家族改革をめぐって—」
167	15.12. 9	エフゲニー S. バ ク シ ュ エ フ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所 沖縄県宮古諸島の聖地・拝所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
①69	16. 5.11	コンスタンティン ノ ミ コ ス ヴ ァ ボ リ ス Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

⑩⑦①	16. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王 述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
⑩⑦②	16. 7.13	Виктор Викторович Рибин Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	16. 9.14	スコット ノース Scott NORTH (大阪大学大学院人間科学研究科助教授) 「セールスマンの死 : サービス残業・湾岸戦争・過労死」
173	16.10.19	SE Yin 色 音 (中国社会科学院民族研究所研究員 教授・日文研外国人研究員) 「シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉」
174	16.11. 9	LEE HanSop 李 漢燮 (韓国 高麗大学校日語日文学科教授・日文研外国人研究員) 「明治期の外国人留学生と文明開化」
175	16.12.14	アレクサンダー マーシャル ヴィーシー Alexander Marshall VESEY (米国 ストーンヒル大学助教授・日文研外国人研究員) 「近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役的役割」
176	17. 1.11 (2005)	ロイ アンソニー スターズ Roy Anthony STARRS (ニュージーランド オタゴ大学シニア・レクチャラー・日文研外国人研究員) 「国家主義者としての三島由紀夫—戦後の原点」
⑩⑦③	17. 2. 8	マッツ アーネ カールソン Mats Arne KARLSSON (ストックホルム大学助教授・日文研外国人研究員) 「僕はこの暗合を無気味に思ひ… 芥川龍之介『歯車』、ストリンドベリ、そして狂気」
⑩⑦④	17. 3. 8	WU Yongmei 呉 咏梅 (北京日本学研究中心専任講師・日文研外国人研究員) 「アジアにおけるメディア文化の交通—中国人大学生が見た日本のテレビドラマをめぐって—」
⑩⑦⑤	17. 4.12	ノエル ジョン ピニンガトン Noel John PINNINGTON (アリゾナ大学助教授・日文研外国人研究員) 「中世能楽論における『道』の概念—能役者が歩むべき『道』」

180	17. 5.10 (2005)	CHI Myung Kwan 池 明観 (日文研外国人研究員) 「韓国現代史と日本について—1973年から1988年まで—」
181	17. 6.14	イアン ジェームズ マク マレン Ian James MCMULLEN (オックスフォード大学ペンブローックカレッジ教授・日文研外国人研究員) 「徳川時代の孔子祭」
⑫	17. 7.12	CHUNG Jae Jeong 鄭 在貞 (ソウル市立大学校教授・日文研外国人研究員) 「韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み」
183	17. 9.20	オギュスタン ベルク Augustin BERQUE (フランス国立社会科学高等研究院教授・日文研外国人研究員) 「日本の住まいにおける風土性と持続性」
184	17.10.11	NO Sang Hwan 魯 成煥 (蔚山大学校人文大学日本語日本学科教授・日文研究外来研究員) 「韓国から見た日本のお盆」
185	17.11.16	セルゲイ ラブチェフ Sergey LAPTEV (マクシム・ゴリキー文学学院助教授・日文研外国人研究員) 「考古学と文字—古代日本の漢字文化を中心に」
186	17.12.20	YOON Sang In 尹 相仁 (漢陽大学校国際文化大学日本語文化学科教授・日文研外国人研究員) 「〈日流〉の水脈—なぜ韓国の若者は日本の現代小説に惹かれるのか」
187	18. 1.10 (2006)	アンドリュウ ガーストル Andrew GERSTLE (ロンドン大学 SOAS 教授・日文研外国人研究員) 「女形の身体を描く—肉体表現と流光斎—」
188	18. 2.21	ウィリアム バック ブレッカー William Puck BRECHER (南カリフォルニア大学助手・日文研外来研究員) 「郊外の隠遁への憧れ—江戸時代の郊外における美学的スペース—」
189	18. 3.14	サーレ アーデル アミン SALEH Adel Amin (カイロ大学文学部日本語学科専任講師・日文研外国人研究員) 「『国語』という神話—日本とエジプトにおける言語の近代化をめぐる—」

①90	18. 4.18 (2006)	KIM Yongui 金 容儀 (全南大学校人文大学副教授・日文研外国人研究員) 「玄界灘を渡った鬼のイメージ—なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか—」
191	18. 5.16	CHOI Park Kwang 崔 博光 (成均館大学校教授・日文研外国人研究員) 「京都と文化表象—18世紀朝鮮通信使の目から—」
192	18. 6.13	LIU Chun Ying 劉 春英 (東北師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「『満州国』時代『新京』に於ける日本人作家」
①93	18. 7.11	ZHOU Wei Hong 周 維宏 (北京日本学研究センター教授・日文研外国人研究員) 「近代化による農村の変貌とその捉え方について—中日農村を比較して—」
①94	18. 9.19	ダリア シュバンバリーテ Dalia SVAMBARYTE (リトアニア ビリニウス大学講師・日文研外国人研究員) 「オセアニアの島々のイメージ形成をめぐって」
①95	18.10.10	エドウィーナ パーマー Edwina PALMER (カンタベリー大学教授・日文研外国人研究員) 「ニュージーランドの学生が学ぶ「日本」—高等教育の社会科カリキュラムを中心に—」
196	18.11.14	ヨセフ キブルツ Josef A. KYBURZ (フランス国立科学研究センター教授・日文研外国人研究員) 「お札が語る日本人の神仏信仰」
197	18.12.13	ロバート エスキルドセン Robert ESKILDSEN (日文研外国人研究員) 「異国船物語—江戸後期に描かれた船—」
①98	19. 1.16 (2007)	プラット アブラハム ジョージ Pullattu Abraham GEORGE (ジャワハルラル ネルー大学日本語学科準教授・日文研外国人研究員) 「日印関係とインドにおける日本研究—宮沢賢治の菜食主義の思想—」
199	19. 2.13 (2007)	スティリアノス パパアレクサンドロプロス Stylianos PAPALEXANDROPOULOS (アテネ大学神学部 準教授 国際日本文化研究センター 外国人研究員) 「日本仏教論—その思想史的展開をめぐって—」

200

19. 3.13
(2007)

LU Liu Di
陸 留弟

(華東師範大学外国語学院日本語学部教授・日文研外国人研究員)
「楽しみの茶と嗜みの茶—中国から見た茶の湯文化—」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

発行日 2007年5月20日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075)335-2048
ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp>

©2007 国際日本文化研究センター

- 日時
2006年11月14日（火）
午後2時～4時
- 会場
キャンパスプラザ京都

第一回 第九卷 神代卷 日本書紀

日本書紀 卷之九